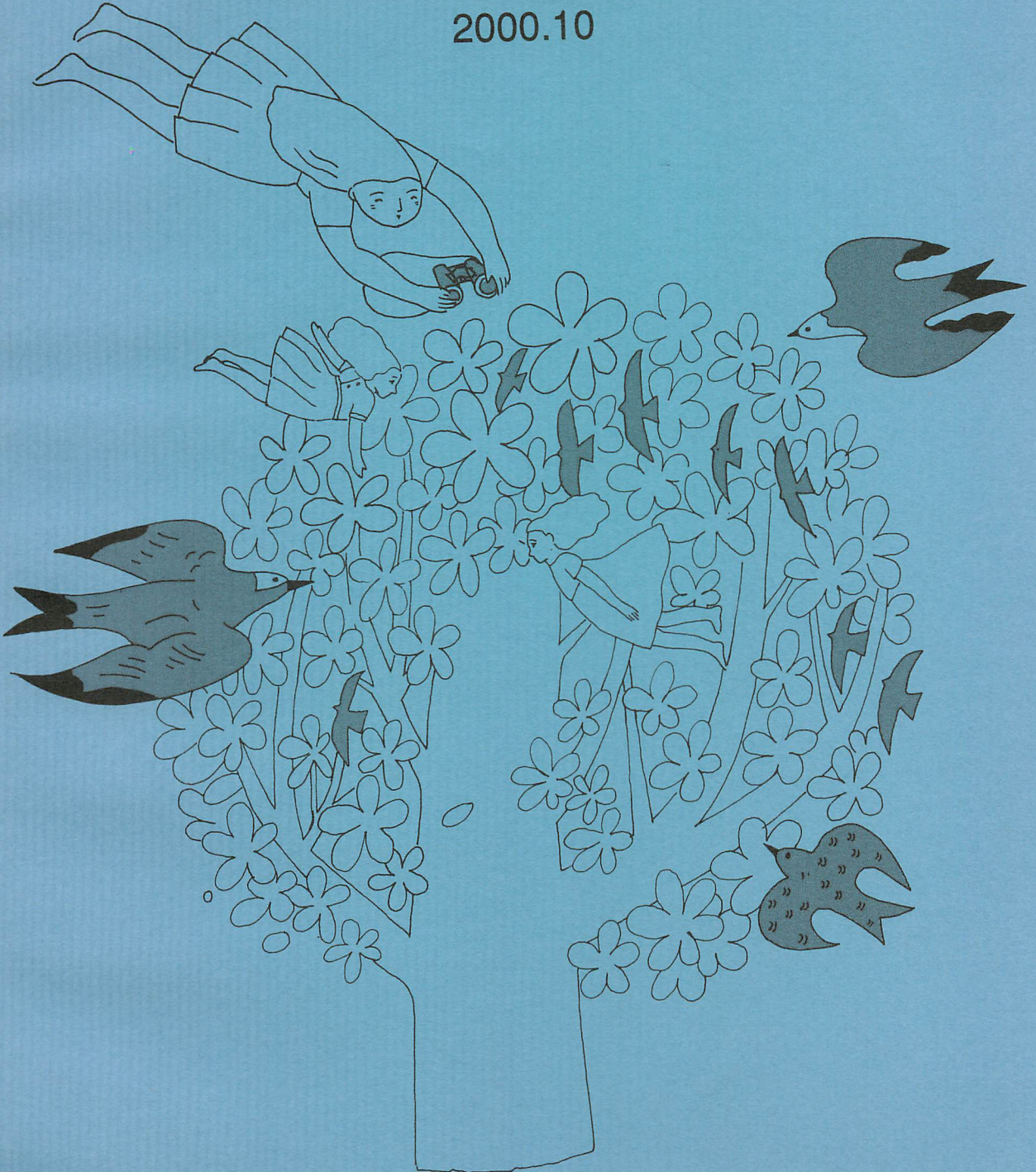


61号

愛鳥教育

2000.10



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.61 2000.10

目 次

会長就任挨拶		
故江袋島吉先生（前会長）の 遺志について -----	杉浦嘉雄	3
実践報告		
地球と遊ぼう '99 イン OTAふれあいフェスタ -----	小野紀之	5
事業報告		
学校ビオトープ・シンポジウム -	染谷優児	13
淡水域生態系の危機 -----	箕輪多津男	14
もりまき通信(11)		
メダカ観察会 -----	森 真希	16
書評		
『野鳥と共に八〇年』 -----	箕輪多津男	18
『カモハンドブック』 -----	箕輪多津男	18
『カモメ識別ハンドブック』 ----	箕輪多津男	19
『探求—私のいた場所 青柳昌宏選集』 -----	増田友紀子	19
全国愛鳥教育研究会役員改選		
役員の入替わり -----		21
新役員名簿（平成12年8月） -----		21
行事案内		
トラストバードウォッチング〔12/9(土)〕 -----		22
編集後記 -----		23

会長就任挨拶

～故江袋島吉先生（前会長）の遺志をついで～

日本鳥類保護連盟とのパートナーシップを活かした
愛鳥教育教材の展開を考える
～「トキ保護教育」を例として～

会長（日本文理大学助教授） 杉浦嘉雄

1. 大空を舞うトキとの出会い～中国陝西省洋県にて～

遙かかなたに横たわる山脈に夕日が沈もうとしている。黄金色に色づく“稲穂の海”は、赤く染まる山の端まで続いていた。地球上唯一のトキの生息地、中国陝西省洋県（センセイショウ・ヨウケン）に着いたばかりの私は、興奮と緊張を押さえながら、日本では幻の風景と化した“大空を舞うトキの姿”を待ち構えていた。

数分が経った。私たち日本人参加者を案内してくれた傅文凱氏（陝西省野生動物保護協会研究員）が、私の背後に広がる雑木林（目測200m程）を指差した。

「この林はトキの最大のねぐらで…」

と説明しかけたその瞬間、タアータアと鳴きながら5羽のトキが突然、林の向うから姿を現した。

天女たちの姿は、まさしく“朱鷺色”であった。「中国トキ保護観察団」の熱い視線を全く気にすることもなく、天女たちは悠然と林に舞い降りた。それから間もなく、数羽から十数羽のトキの群が次から次へとねぐらに舞い降りてきた。

このねぐらに集まったトキは、最終的に51羽となった。野生のトキの総数が120羽であることから、この地が「最大のねぐら」であることを納得した。

飛行機で名古屋から北京経由で西安へ、その翌朝マイクロバスで9時間かけて秦嶺山脈を越え目的地の洋県に着く。これが、(財)日本鳥類保護連盟主催「中国トキ保護観察団」(2000年9月)に参加しての「トキとの最初の出逢い」であった。

2. トキという存在が持つ象徴的な意味

トキは次のような「多様な象徴的意味」を持っている。これは、当研究会が進めている「愛鳥教育」の教材テーマとしても、極めて重要であると考えている。

(1) 日本を代表する“野生生物”としての象徴的存在

学名が「ニッポニア・ニッポン」であることがその証しと言えるであろう。

(2) “絶滅種”としての「普遍的アプローチ」を有している象徴的存在

日本産トキの明治・大正時代における減少原因は銃圧。戦後は、森林破壊や農薬大量使用など生息環境の悪化によって絶滅への道をたどった。

(3) 中国産トキへの救援活動や国際協力等が示す“復活”への「普遍的アプローチ」を有している象徴的存在

中国産トキの保護および増殖計画に関する日中による官民の協力は、やがて復活へのシナリオを実現する方向を向いている。

(4) 人間活動と野生生物の生息環境保全の調和に関する象徴的存在

トキと人間の共生に関するこれらの取り組みは、他の野生動物との共生にも示唆を与える。

3. (財)日本鳥類保護連盟とのパートナーシップ事業の例として

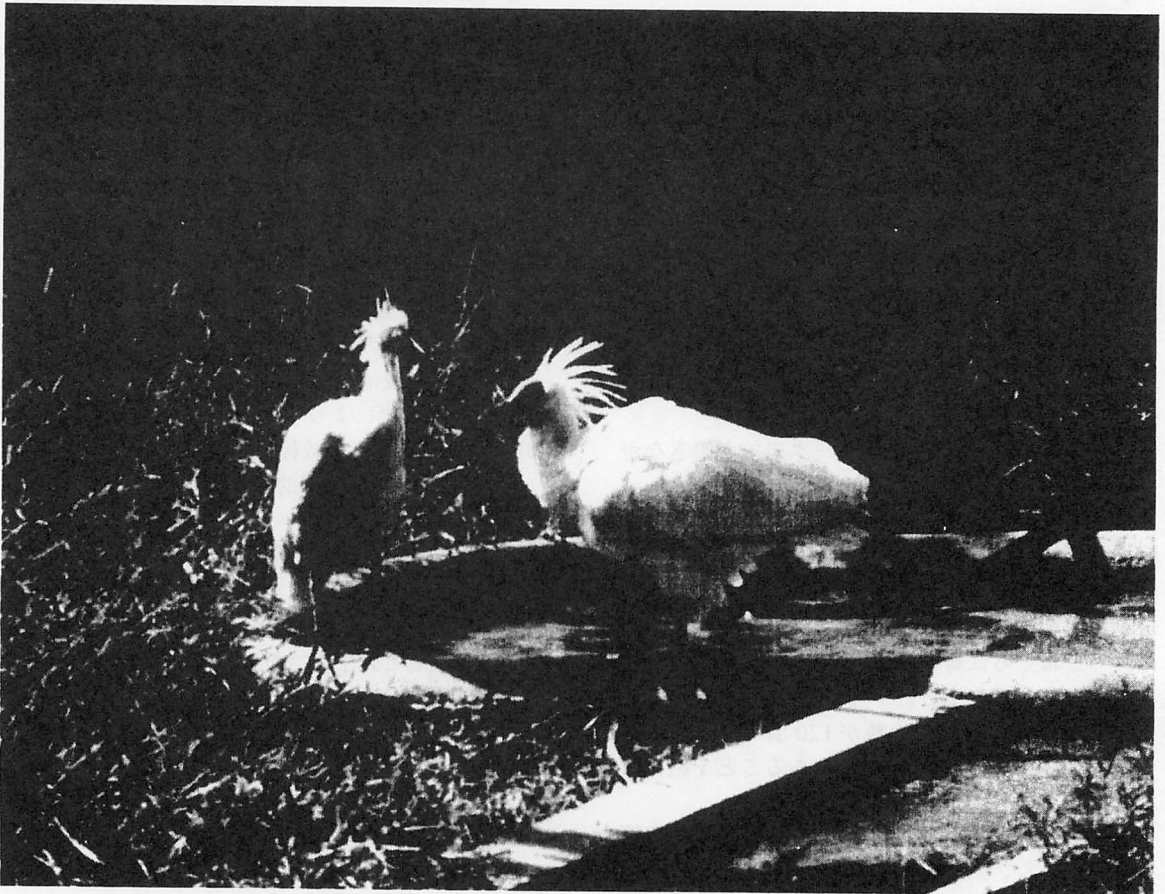
私は、(財)日本鳥類保護連盟の主要事業である「トキ保護」と当研究会の「愛鳥教育」の間に、「トキ保護教育」というテーマが存在しうると考えている。そして、連盟の代表的事業を当研究会がお手伝いすることで、その内容をより充実させていくことができるのであれば、

「日本鳥類保護連盟とのパートナーシップを、我が研究会が具体的事業の実践をしながら、より強めていきたい。」

とおっしゃっていた故江袋島吉先生の遺志を実現することにもつながると考える。

幸い、当研究会では、村本義雄・新顧問をはじめとして「トキ保護」をライフテーマにされる実践家の輪が広がりつつある。私は、これからこの「トキ保護教育」を、当会の主要なテーマとして取り上げていきたいと考えている。

当会役員の方々はもちろんのこと、会員の方々一人お一人が、ご自身の「愛鳥教育」に関わるテーマの展開と深化を図られると共に、当会事業についてのご意見やご提案、また実践報告をお寄せいただければ幸いです。



洋県トキ救護飼養センターのトキ (日本鳥類保護連盟会員の後藤袈裟登氏撮影)

実践報告

地域型環境学習イベント

地球と遊ぼう '99
イン O T Aふれあいフェスタ

環境パートナーシップが今、動き出す

常務理事 小野紀之

前回に続いて「地球と遊ぼう」のイベントを以下のように実施しました。その報告書を掲載することで、実践報告といたします。

環境パートナーのみなさまへ

昨年よりはじまった「地球と遊ぼう」の企画もなんとか「…'99」を実施することが出来ました。

昨年同様、この企画の基本コンセプトである「遊び感覚」で、また多くの人たちと身近な環境に触れ、環境について考えてもらうきっかけを提供できたのではないのでしょうか。

そして今回は、参加してくれる人たちのためのイベントから、主催者である私たち自身がパートナーシップを組んで、出来ることから協力していくことの可能性と大切さを実感することの出来る企画であったように思います。もちろん、まだまだ不十分な点も多々あり、ご協力いただいたみなさまにもご迷惑をおかけしたことと思います。改めましてこの場をお借りしてお詫び申し上げます。

次回、ミレニアム・プロジェクト「…2000」として、改めてみなさまとごいっしょに新たな夢の企画が実現できることを願いつつ、この報告書をお送りいたします。

最後になりましたが、ご支援、ご協力いただきました個人、団体、企業、学校、行政機関のみなさま、そして、いっしょに汗を流してくださったスタッフのみなさまに心より御礼申し上げます。

1999年11月

地球と遊ぼう '99 実行委員会委員長 小野紀之

<企画主旨>

昨年の第1回は、会場の確保からプログラムづくり、広報に至るまで、多くの方々の協力をいただきながらも、すべて私たちのオリジナル・イベントとして実施しました。都立水元公園の各所に設定され

たポイントでは、自然体験ゲーム、工作教室、観察会などが行われ、当日公園を訪れた多くの方々が気軽に参加し、遊びを通じて環境問題に関心を持ってもらうきっかけをつくることが出来ました。

さらに、当日参加者に配布された野鳥のぬりえを完成してもらい、その後実施された展示会(同公園内、緑の相談所にて)での展示によって、1回限りのイベントから広がりをもつ期間イベントへと展開することが出来ました。

このように本企画「地球と遊ぼう」は、単なる環境意識啓発のためのイベントではなく、新たな活動のあり方を模索、実験する進化的環境学習活動です。

そこで第2回目の今年1999年は、新たな21世紀への橋渡しとして、プログラムの内容以上に活動組織そのものの新たな展開を模索し、環境活動のキーワードのひとつとなっている「パートナーシップ」を実際の形とするべく、活動することにしました。また、実施にあたっては、昨年のようなオリジナルイベントではなく、大田区が参加者25万人以上の実績をもつ「O T Aふれあいフェスタ」の中にブースとステージイベントで参加することにしました。

今回も昨年同様、運営管理は実行委員会ですが、実質的な運営にあたっては、それぞれのもつ知識、情報、ノウハウ、そして資材をご提供くださった個人、団体、そして準備の段階から当日に至るまで直接ご参加をいただいたスタッフをメンバーとする『環境パートナーシップ』が中心となり、その組織、体制の可能性を探ることが大きなテーマとなりました。

自然環境、都市環境の垣根を越え、そしてまた、団体、企業、学校、行政、そして個人の枠を越えた活動のあり方を、実践を通じて多くの方に知ってもらえることが出来たらと考えています。

<実施概要>

開催日 1999年10月23日(土) 天候：晴
24日(日) 天候：晴

開催時間 10:00～16:00(両日とも)

会場 大田区平和島一带

OTAふれあいフェスタ会場内

緑のエリア(平和の森公園)

太陽のエリア(平和島公園)

主催 「地球と遊ぼう'99」実行委員会

小野紀之(実行委員長)

島田親吾(ブース担当)

清水正也(ミュージカル担当)

運営

『環境パートナーシップ』

NPO法人環境学習研究会

エコクラブOTA

環境ミュージカル「上を見れば青い空」

実行委員会

全国愛鳥教育研究会

東京都環境学習リーダー有志

株式会社共立理化学研究所

株式会社西友

帝人株式会社

三菱鉛筆東京販売株式会社

ヒルトン東京

社団法人東京都建築設備設計協会

大田区立池上第二小学校

大田区環境部環境保全課

東京都環境学習センター

東京都環境保全局指導相談課

東京都清掃局

(敬称略、順不同)

<当日参加スタッフ名> (敬称略、順不同)

島田親吾、清水正也、山久夫、大橋春男、
河野順一、大堀由紀子、原陽司、木村幸一郎、
岩崎美鈴、和田恭一、斉藤創、土屋善一、
高嶋守、板倉基紀、小林晶子、中野登美、
田中輝明、後藤忠、杉山良樹、新田正子、
水越正幸、三上剛司、都築なつめ、倉地鉄雄、

森光子、佐伯捨一郎、西尾忠恕、山本晃、
小野紀之

このほかにも多くの方々のご協力をいただきました。

<実施状況>

当日、ふれあい体験ブース『赤ずきんちゃん平和の森ふれあいツアー』を「緑のエリア」に設置。環境ミュージカル『上を見れば青い空』を「太陽のエリア」で上演した。

■ふれあい体験ブース

『赤ずきんちゃん平和の森ふれあいツアー』

展示ブース見学者 約600名

ふれあいツアー参加者 466名(記帳者ベース)

内訳：23日 214名

24日 252名

参加年齢：0歳～70歳

<報告>



このプログラムは、年齢を問わず大人から子どもまでが楽しめるもので、受付を終え、スタンプカードをもらった参加者がグループになって、赤ずきんちゃんといっしょに体験ポイントを廻って、自然を五感で感じるゲームです。

また、グループに渡されたマイバッグ(エコバッグ)には、ポイントをクリアするたびにリサイクルの流れ(加工原料の変化)がわかる品物が与えられ、ゴールでは生まれ変わった製品を見ることが出来るようになっていきます。

◆スタート

案内役の赤ずきんちゃん(スタッフ)からツアーの説明を聞き、「マイバッグ」を持って、いざ出発。

赤ずきんちゃん役のスタッフは、女性ばかりではなく、もちろん男性も参加。赤い頭巾(バンダナ)に赤いエプロンのいでたちは、参加者がはぐれないための目印でもあります。初日は、一部フェイスメイクもしたのですが、あまりの人の多さにそれもあり目立たないので自然消滅。ホッとしたスタッフもいたのでは…。



◆ポイント1「土にかえれないもの、いくつ?」(見る)

このポイントでは、ロープに囲まれた地面に置かれているプラスチック製の虫や造花、たばこの吸殻など、このままにしておいても自然に還らないものを見つけ出し、その数を当てるゲームを実施。自然への負荷となるもの、捨てないマナーなどを知ってもらうと共に、「見ること」について改めて感じてもらいました。

普段あまり意識して「見て」いないことに気づく人も多く、また、その数を当てることに関しては、



大人も子どももハンデキャップはなく、親子で参加した人たちは真剣に競争していたようです。まわりを散歩していた人まで参加するひと場面もあり、終始楽しく、なごやかなポイントでした。

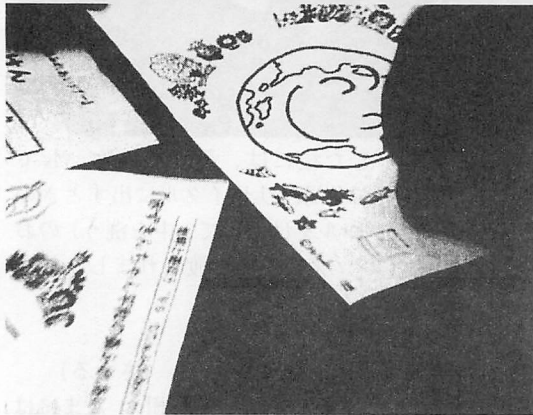
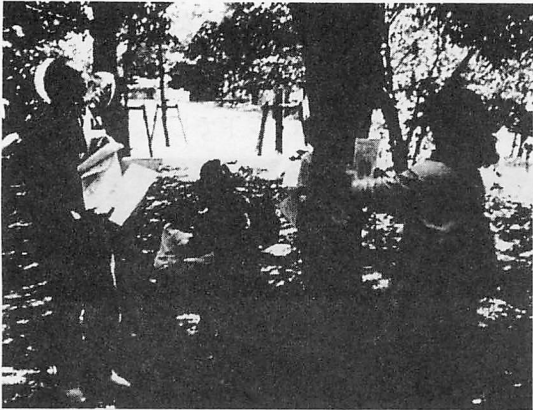


全員がクリアした後は、最初の品物として「ペットボトル」が登場。リサイクルに出すときのマナー(フタやラベルをはがして、中を洗う)のお話があり、マイバッグの中へと渡されました。さて、次は何にかわるのかな?。

◆ポイント2「なんでもピカソ!」(さわる)

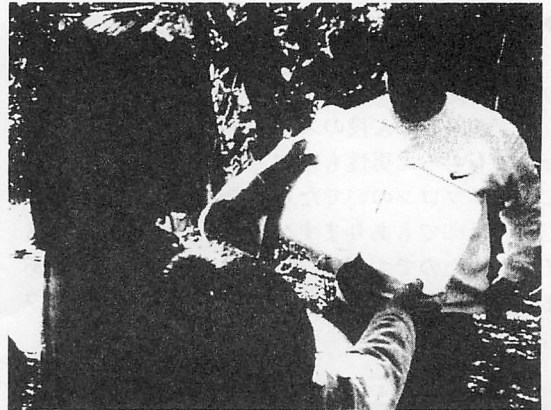
公園の中に生えているいろいろな樹木。たまには樹名板を見るかもしれませんが、さわることはほとんどありません。そこでこのポイントでは、まず周囲に生えている樹木の木肌にふれてもらい、その感触や温もりを楽しんでもらいました。そして次に、その木肌を利用して、「お絵かき」に挑戦。スタッフの描いたバナナの黄色は、ややすべすべした木肌の上で、そっとクレヨンがこすられていました。りんごや魚、なかにはピカチューなども登場。参加者それぞれが感性あふれる絵を描いていました。





無事ポイントをクリアしてもらえらるスタンプも参加者たちの楽しみのひとつ。にこにこ顔の地球のまわりに動物、鳥、植物、魚、そしてもちろん人間も描かれたスタンプカードは、多様性に富んだ地球の共生をイメージしたもので、スタッフの力作です。そこに押されるスタンプもすべて手作り。次は何の絵柄かな？。

ポイント2では、「ペットボトル」が「フレーク」そして「チップ」に変わることが説明され、その現物も見てもらいました。フレークはまさにプラスチック製のくずれたコーンフレークといった感じでしたが、チップ(子どもたちはこれをビーズのようと言って感動していました)のクリスタルのような輝きには一同驚いていました。このようなきれいなチップが出来るのも、ちゃんとみんながマナーを守って、リサイクルすればこそ。そんな思いを伝えることができたかな。ペットボトルをチップと交換して、次のポイントへ。



おまけとして、ここでは「食品トレー」のリサイクルのマナーについても説明しました。リサイクルに出せるのは白いトレー。お店に行ったらよく見て買うよ、という子どもの返事にはスタッフ一同、感激。

トレーのリサイクルの行方は、ゴールでのお楽しみ！。

◆運動コーナー「あたまとからだは使いよう！ うまく飛ばせるかな」(からだを動かす)

24日急遽出来た新ポイント。前日の進行状況の反省で、ポイント2からポイント3への展開に時間的な無理のあることが判明。ゴールでの参加賞としても人気のあったペットボトルのリサイクルから生まれたシンプルなおもちゃ「フライング・シリンダー」で遊ぶコーナーを開設。林の中の開けた空間を生かし、大人も子どももいっしょになってシリンダーを飛ばしながら、駆け回りました。

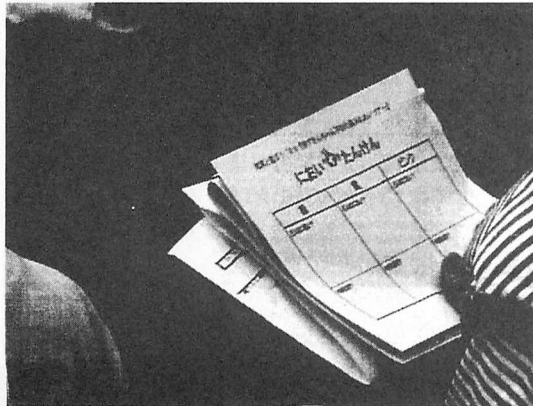
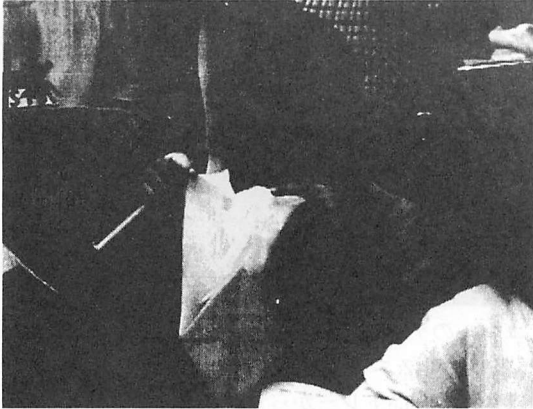
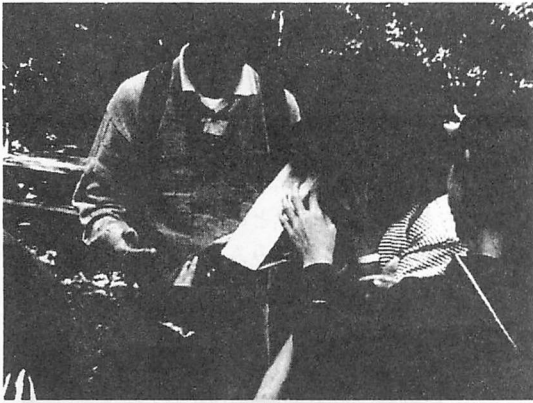
このおもちゃは、力任せでは飛ばない代物。手首のスナップをきかせて、みんないい汗かいていました。



自然を学ばせることばかりが環境学習ではなく、その入り口として、自然の中で遊ぶことの楽しさを知るきっかけを提供することも今の都会の人たちには大切なことではないでしょうか。

親子がいっしょに遊ぶこと。そんなことも今の人たちにはむずかしいことなのかもしれません。

◆ポイント3「これ、何のにおい」（嗅ぐ）



自然の中にはいろいろなにおいがあります。いいにおい、いやなおい。でも、本当にそれらのおいにおい嗅いでいますか。きれいな花を見て、そのにおいにおい嗅いだつもりでいませんか。ここでは、自分の鼻の能力を最大限に使って、いろいろなにおいにおい嗅いでもらい、その感じたままをみんなで書いてみました。

今回は、公園に咲いていたキンモクセイの花、ドクダミ、公園の腐葉土の3種類を袋に入れ、中身を見ないでにおいを参加者全員に嗅いでもらいました。

キンモクセイをトイレの芳香剤のにおい、ドクダミを漢方薬のにおい、腐葉土を香ばしいにおい、などユニークな回答もありました。

普段あまり意識したことのない身近なおいを真剣に嗅いでいる参加者の様子を見てみると、身近な環境への関心の持たせ方のヒントをまた見つけたような気がしました。

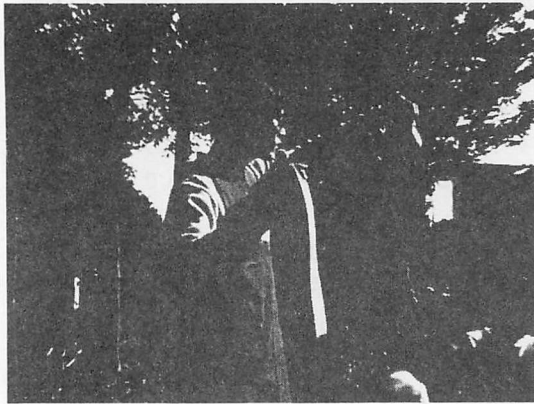


リサイクル・バトンリレーも、「チップ」からふかふかしなやかな「原綿」「紡績糸」へとバトンタッチ。直接ふれた感想は、誰もが好感触。絹糸のよう、という声もありました。今までのペットボトルからの変化の姿を振り返りながら、こんなにきれいな糸になるんだったら、ちゃんと資源としてリサイクルにださなくちゃね、という言葉が参加者から聞いたときには、主催者として今回の目的のひとつが伝わったのかな、と安堵の気持ちでいっぱいでした。

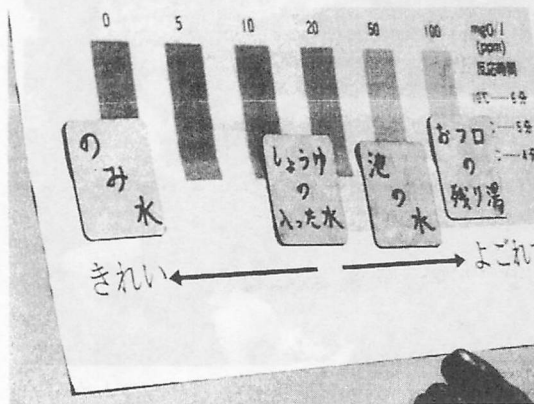
そうこうしながら、においにおい嗅いだり、さわったりして楽しんでいた参加者たちも、あとからやってきたグループに急がされるように最後のポイントである水辺に立つのぼり旗を目指して斜面の道を下り始めました。

◆ポイント4「池の水を当てろ！」（調べる）

このポイントでは、頭の体操的に推理する楽しみを味わいながら、水を汚すということがどんなことなのかをいっしょに考えてみました。



目の前の池から汲み取った水。魚は泳いでいるけれど、その緑色をした色からはどの参加者もあまりきれいという印象をもっていない様子。



ここでは実験に使用するCODパックテストについての説明もそこそこに、その反応色の意味を飲み水と風呂の残り湯を例に解説。説明の内容が子どもにも理解できたことを確認して、さあ問題。

「今汲んだ池の水とここに用意した醤油を数滴たらした水、さて、どちらがどの辺りの色になるのかな？」

ボードに貼られた答えは、いつもバラバラ。でも、みんな真剣に考えてくれました。

正しい答えは「池の水のがきれい」でした。

この実験のねらいは、自然界において水を汚すということが、単に人間が食べられるものならきれい、食べられないものなら汚いということではないことを知ってもらうことでした。自然への負荷を少

しでも少なくするための生活の配慮。台所の排水口から川がはじまることに気づいてもらえれば、きれいな川の再生への関心も高まるのではないのでしょうか。

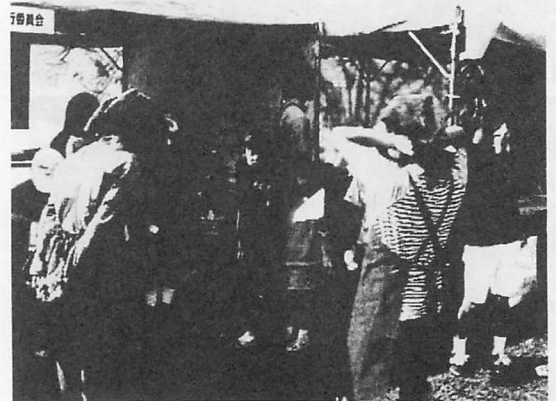
最後に、飲める水であるかどうかを調べるには、さらにいろいろな検査が必要なことももちろん説明しました。

リサイクル・リレーは、ここではバトンタッチはなく、いよいよゴールのブーステントを目指して、参加者一同足早に歩き始めました。

◆ゴール

約40分間におよぶツアーに誰も飽きることなく、全員がゴール。

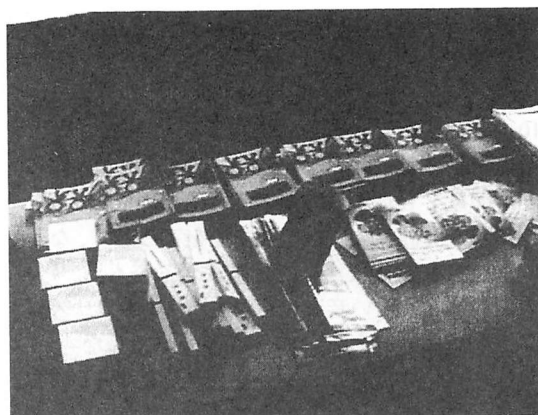
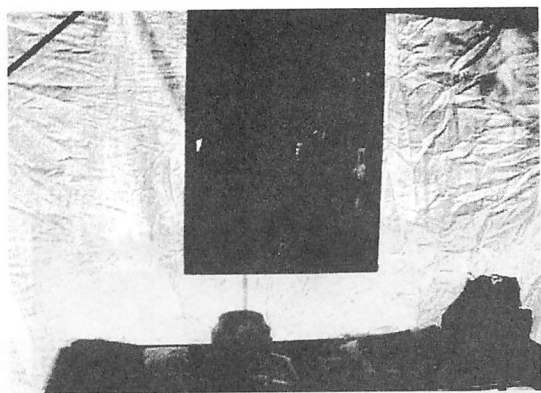
いろいろな方法での自然とのふれあいやリサイクルの流れに沿ったリレーにみんな関心の目を向けてくれました。



ゴールのテントでは、「ペットボトル」がついに「洋服」や「スニーカー」に変身。

ほかにも食品トレーからリサイクルされたボールペンやペンスタンド。牛乳パックからつくられたトイレトーパーなどの製品にふれながら、資源の大切さを「感じ」てくれたことと思います。

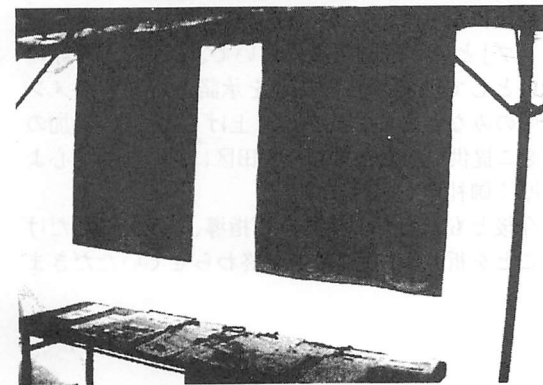
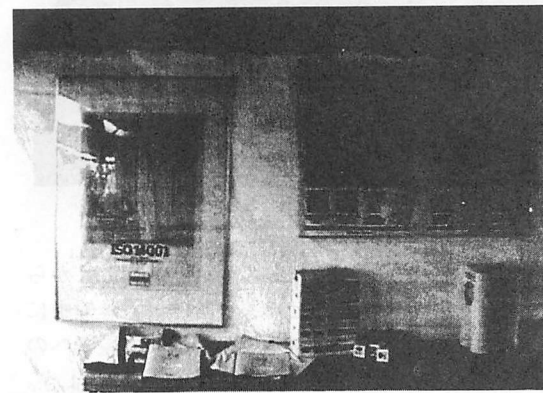
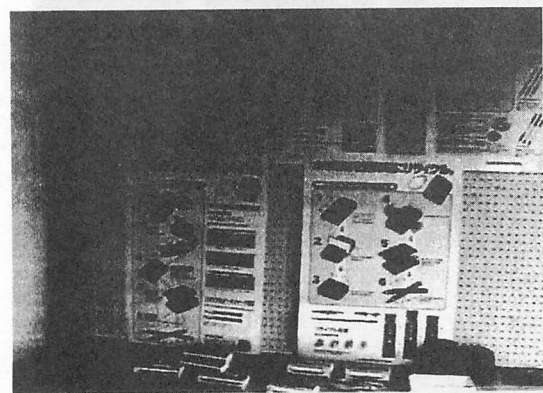
テントの中には、同じ大田区の子どもたち（池上第二小学校生徒）が研究し、まとめた資料の展示や協力してくれた企業の提供による資料や製品もあり、今まで学習してきたことがより深く理解されたのではないのでしょうか。



最後に参加者のみなさんには、「環境パートナーシップ」メンバーとしてご協力いただいた企業、行政から提供された子供向け読本、花のたね、リサイクル製品などのお土産があり、それを手にそれぞれ会場へと戻っていきました。

<運営こぼれ話>

- ・参加者の子どもの中には、案内役をしているスタッフに代わって、赤ずきんちゃんの格好をして案内役をしてくれる子も幾人か出てきました。まさに参加者とスタッフがいっしょに楽しめるイベントならではの光景でした。
- ・運動コーナーの設置は、時間調整のための苦肉の策でしたが、予想以上の反響にスタッフも大喜び。臨機応変な対応が出来るのはいつものことですが、どのポイントを担当させられてもすぐに対応してくれるのもこのスタッフの魅力です。



■環境ミュージカル『上を見れば青い空』

<公演報告>

10月23日(土) 12:30 公演

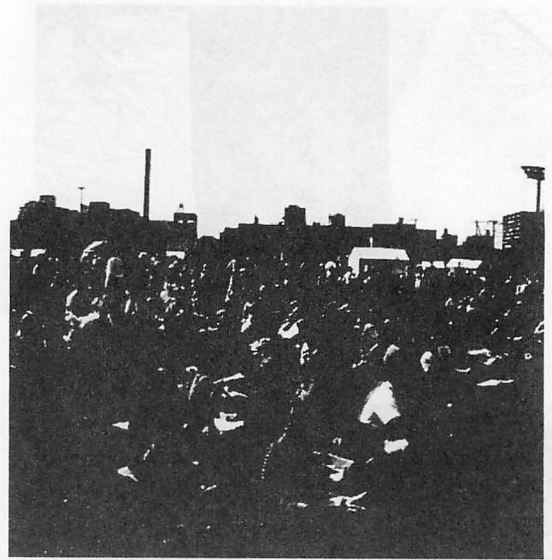
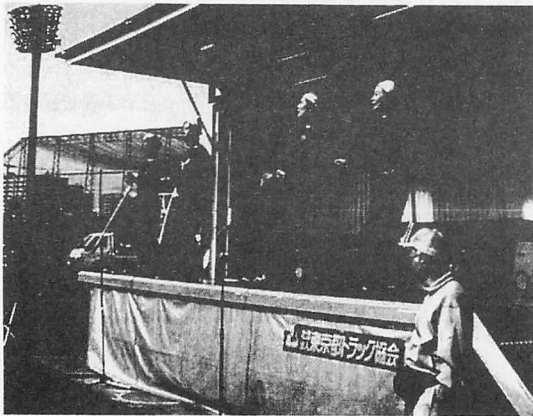
10月24日(日) 12:00 公演

環境問題をテーマにしたミュージカルなだけにへびな印象をもたれる方がいるかもしれませんが、なごやかな雰囲気の中、芝生に腰を下ろして、なかには家族で食事を取りながら鑑賞する姿も。

その親しみやすい音楽に、途中から身体でリズムをとりながら舞台を見つめる観客もいました。

フィナーレでは、配られた楽譜を見ながら、観客と舞台とが一体となつての合唱も。

メインテーマ曲には、手話の振り付けがされています。舞台メンバーのやさしい指導に合わせて、客席の大人から小さな子どもまでもがいっしょになってミュージカルを楽しんでいました。



<おわりに>

この報告書には、当日の進行の一部が書かれているに過ぎません。なぜなら、この企画においては、常に新しい発見や感動がそれぞれの参加者、スタッフにあるからです。それをすべてここに報告するにはあまりの時間とスペースが必要であることは言うまでもありません。

それぞれの得たものが、いかにすばらしいものであったかは、今後のこのスタッフ一人一人の活動を見守っていく中で感じていただきたいと思います。

常に時間に追われながらの準備、迎えた当日の混乱。まわりの人たちにもハラハラドキドキの連続でご心配をおかけしておりますが、スタッフの中にはこの混乱を楽しむ余裕が出てきた者もいます。

「地球と遊ぼう」に関わるスタッフは、これからも「遊び心」を忘れることなく、自らが困難の中にあっても、その笑顔で参加者を楽しませ、環境への関心を高めるためがんばり続けることでしょう。

最後になりましたが、今回の「環境パートナーシップ」という運営組織において、すべてが同等の扱いとして併記されることを承諾いただいたメンバーのみなさまにお礼を申し上げますと共に、参加の場をご提供いただきました大田区に対しまして心より厚く御礼申し上げます。

今後とも私たちの活動をご指導、ご鞭撻いただくことを祈りつつ、ご報告を終わらせていただきます。

事業報告

学校ビオトープ・シンポジウム

副会長 染谷 優 児

前号でお知らせしましたように、去る9月22日(金)23日(土)の両日にわたり、愛知県蒲郡市・名古屋市で『学校ビオトープ・シンポジウム』が開催されました。本会は、主催者の依頼を受け、後援団体の一つに名を連ねました。

本会からは、渥美守久副会長と私、そして事務局から箕輪多津男氏の3名が参加しました。

(財)日本生態系協会が、本年2月、第1回「全国学校ビオトープ・コンクール」を開催したことに象徴されるように、「学校ビオトープ」に関する議論と実践とが各方面で進められつつあります。

本会でも、かつて『愛鳥教育No.50(1997.6)』で特集「自然教育園を造ろう」を組み、報告と議論に取り組んだことがあります。

第1日目は渥美守久副会長がビオトープ視察案内講師を務められました。そして、第2日目もシンポジウムの基調報告をスライド映写を交えながらなされました。

今回の視察地には、かつて渥美副会長が中心になって造成した蒲郡市立形原北小学校の「形北愛鳥の森」と蒲郡市立西浦小学校の「きじっ子の森」が含まれていました。

「形北愛鳥の森」は、校庭の一角にある遊具施設跡に造られた森です。その最初の報告が『愛鳥教育No.2(1980.11)』で、次いで『愛鳥教育No.39(1991.12)』でなされています。

面積的には約600㎡と決して広いものではありませんが、現時点での森としての質の高さには目を見張るものがあります。20年間、全く人の手を入れなければこれだけの森になるという、正にビオトープの創出そのものの実践であったことが改めて理解されるものでした。

「きじっ子の森(1987.3完成)」については、同じく『愛鳥教育No.39(1991.12)』に報告されていま

す。

ここでは、単に森を作ったというだけでなく、これだけの多様な教育活動がなされているという報告がなされました。

発表終了後、渥美副会長が、私に、「今時、ビオトープといえば何か新しい思想や活動のようにも思われているようだが、『愛鳥教育』として実践してきたことが、ある面でビオトープを先取りするものであったということが、今回、これまでの自分自身の実践を改めて振り返ってみる機会が与えられたことで、再確認することができた。

そして、今思うことは、ビオトープをつくることの意味に加えて、ビオトープは単に作ればよいというものではないということだ。それをいかに教育に利用していくかということが大切なのである。その点、本会には過去20年にわたり『愛鳥教育』として積み重ねてきた実績がある。

これからは、ビオトープ関連の諸団体と連携しながら活動していくことは大切だが、本会が積み重ねてきた実績とその内容には、これからも立派に通用していくものがあるし、十分に自信を持ってよいものだと思う。

これからも本会としての使命遂行に努めていきたい。」

と話されたその言葉が深く心に残りました。

「愛鳥教育」の意味や手法については、本会としても、機関誌『愛鳥教育』だけでなく、(財)日本鳥類保護連盟編『まろう鳥みどり自然』の中でも1章をいただいて発表しています。この本も、ビオトープ関連の方々も含めて各方面の方々にぜひ読んでいただければと改めて思った次第です。

以上、取り敢えず報告といたします。なお、今回のシンポジウムの具体的な内容については、主催者側で何等かのとりまとめがなされるとのことですので、発表された時点で『愛鳥教育』にも掲載する予定です。

淡水域生態系の危機

～移入種の脅威～

事務局 箕輪 多津男

移入種によるわが国の自然生態系への悪影響と破壊的行為は、もはや抜き差しならない深刻な事態に陥ってきている。

『愛鳥教育』58号において、当研究会の平田常務理事が「在来種の保護について」と題する論説でも指摘している通り、本来そこに生息していない強力な種を人為的に導入することによって、そこにあった生態系が破壊され、在来種が絶滅に追いやられ、その結果、およそ「自然とは呼べない」ような単純化した環境だけが残される。こうした状況が、国内の至るところで繰り返されているわけである。このことは、自然環境の中でも殊に淡水域生態系において顕著である。

それを裏付けるような記事が、先日、新聞に掲載され、改めて背筋が寒くなる思いがした。問題の記事というのは、住宅地にある公園の池で起こったことの紹介なのだが、魚種の構成の推移に関しては、天然の池においても同様の現象が起こるものと考えられるので、ここに引用する次第である。

それによると、面積約2,000㎡の池に、当初はメダカやクチボソ(モツゴ)が順調に増えていたようなのであるが、本年5月に改めて掻い掘り(池の水抜き)をしてそこに生息する魚を全部すくって調べたところ、何と北米産肉食魚であるブルーギルが2,551匹、同様にブラックバスが155匹も見つかった。それ以外の魚種は、ヘラブナが133匹、コイが27匹、ドジョウが4匹、ウグイがわずかに3匹であった。

このように大型あるいは中型の魚は何とか生存していたものの、メダカのような小型魚は一匹も生き残っておらず、ブルーギルやブラックバス等、移入された強力な肉食魚の脅威をまざまざと見せつけられる結果となった。

移入種の中ではブルーギルとブラックバスの2種が、現在、最も問題となっているが、こうした都市公園の池にまで放され、猛威を奮っているとなると、もはやありとあらゆる淡水域生態系が、危機にさらされているのではないかと危惧される。それがすべて人為的なものによるだけに、ある種の憤りも

禁じ得ない。

こうした状況は、日本ばかりではなく、お隣り韓国でも深刻なようである。と言っても、こちらで猛威を奮っているのはウシガエルである。このウシガエル、元はと言えば食用として日本から持ち込まれたものである。(日本へも元々今世紀に入って、原産地である北米東部地域から、やはり食用として移入された。)一時、国民の間で健康食(?)として持てはやされたようであるが、やがてブームが過ぎると人々は持て余してしまい、各地の水辺に次々に放してしまったわけである。その後、これが韓国各地の池や沼等で大繁殖し、手のつけられない状態になってしまった。しかも、彼らにとって栄養豊富な環境であったためか、通常よりも体長がかなり大きくなっており、また恐ろしいことに多くの魚類や昆虫等と言うまでもなく、他種のカエル、ネズミや小型鳥類、果ては中型のヘビに至るまで次々に丸呑みにしてしまうという、すさまじい食欲を示しているのである。ヘビがカエルを呑み込む光景は目にするところがあるが、カエルがこともなげに中型のヘビを呑み込む姿というのは、やはり奇異なものである。

こうした状況は、日本のテレビ番組でも一部紹介されていたようであるが、深刻な問題としてどれくらいの人々に受けとめてもらえたであろうか。

ブルーギルやブラックバスだらけの池。ウシガエルだらけの沼。人間の勝手な行為により、極限まで単純化されていく生態系の成れの果ての姿をそこに見る思いがする。事態はこの上なく深刻であると、改めて強調したい。

自然生態系の本来の姿とはどういったものであるか、それを伝えていくための教育普及活動が、今ほど重要な時はないであろう。移入種を無意識に、あるいは問題性を知りつつも平然と持ち込み続けるような人々の認識を変え得るかどうかの間われることになるが、力をこめて生態系の真の姿を説き続ける必要がある。それがまがいなりにも自然保護活動に携わる者の、未来に向けた責務であると考え次第である。

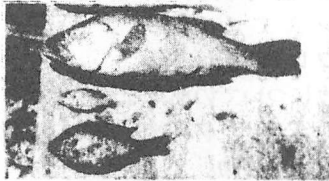
横浜市の市民グループが、住宅地の人工池の水を抜いてみたところ、全国の湖沼で爆発的に繁殖している外来魚のブルーギルが約二千五百匹も見つかった。人気の釣り魚ブラックバスも約百五十匹いたが、フナやコイなどの在来種は合わせて百五十匹ほど。これらの調査結果は、住民たちによって報告書にまとめられたが、肉食性外来魚の密放流は、団地のオアシスの様相も変えているように、公園行政担当者も「池の魚をすべて調べたデータは非常に貴重」と注目している。

この池は、横浜市都筑区の港北ニュータウンにある「鴨池」。面積は約二千平方メートルで、市が一九八七年に作った。地元の「鴨池公園愛護会」が市の助成金を得て「トンボ王国」作りなどに取り組んでいた。市は魚の放流も愛護会に任せてきたが、開園から間もなくブラックバスやブルーギルが見つかり、九四年には池の水を抜く「種い堀り」をして駆除していた。

それから六年が過ぎ、自然教室で捕まえたブラック

肉食性外来魚ブルーギル 住宅地の池に2500匹

ブラックバス（上）とブルーギル



鴨池で駆除された大量のブルーギル（ケースの中）とブラックバス（上）

在来種 たった 150 匹 横浜・港北 ニュータウン

バスの腹からトンボが出てきたことから、今年五月、市と愛護会などが共同で二度目の種い堀りをした。三日かけて魚を全部すくい取ったところ、見つかったブルーギルは、千五百五十一匹。次いでブラックバスが百五十五匹。ヘラフナが百三十一匹、コイが二十匹。七匹、ドジョウ四匹、ウグイ三匹。コイやヘラフナはいずれも大型魚。ブラックバスの腹からはブルーギルも見つかり、小魚を食べ尽くして、肉食魚を襲い始めていることが分かった。ブルーギルとブラックバスは肥料用に処分された。

愛護会の市川順而会長は、食いの末にえさがなくなると沖繩を除く四十五都府県が外来魚の移植を制限する内水面漁業調整規則を定め、ブルーギルは、北米原産の大きな新潟県では、釣った魚を元の川に戻す「キャッチ・アンド・リリース」も禁止されている。しかし、外来魚は漁業水面から、都市公園にも押し寄せ、東京都が九六年に投網などを使って行った生物調査では、北区と板橋区にまたがる浮間公園や文京区の六義園、三鷹市の井の頭公園などで数百匹のブルーギルが見つかった。皇居外苑のお濠にも大繁殖して環境庁が駆除を行っている。

水産庁によると、北海道と沖繩を除く四十五都府県が外来魚の移植を制限する内水面漁業調整規則を定め、ブルーギルは、北米原産の大きな新潟県では、釣った魚を元の川に戻す「キャッチ・アンド・リリース」も禁止されている。しかし、外来魚は漁業水面から、都市公園にも押し寄せ、東京都が九六年に投網などを使って行った生物調査では、北区と板橋区にまたがる浮間公園や文京区の六義園、三鷹市の井の頭公園などで数百匹のブルーギルが見つかった。皇居外苑のお濠にも大繁殖して環境庁が駆除を行っている。

もりまき通信(11)

～メダカ観察会～

自然観察指導員 森 真 希

●ネームバリューの大きさ

この「メダカ観察会」が行われた米子水鳥公園は、首都圏にある公園と比べると、幾分交通手段に不便なところがある。最寄りのバス停からネイチャーセンターまでは、徒歩20分以上かかる上にバスの本数も少ない。小中学校がある住宅地からもやや距離があるので、気合いの入っている元気な小学生たちが自転車で鳥を見に来ることもあるが、殆どの来館者は車で訪れる。コハクチョウたちを始めとする水鳥が沢山見られる渡り鳥の季節は、ネイチャーセンターも賑わっているが、夏の来館者数は激減して、観察ホールも非常に淋しくなる。

その夏に行われた「メダカ観察会」。ところが、「メダカ」という名がここまで人を集めるものなのかと思う程、例年の夏の企画と比べて、問い合わせ件数や参加者に顕著な差が出たのであった。昨年、環境庁がまとめている「レッドリスト」に絶滅危惧類としてメダカが指定された。このことが新聞にも大きく報道されたこともあって、市民の「メダカ」に対する意識がより高くなったことによるものと思

われる。

●観察会データ

期日：2000年7月8日（土）

時間：午前10時～11時30分

集合場所：米子水鳥公園ネイチャーセンター
観察ホール

参加者：大人11人、子供21人、計32人

タイムテーブル

- 10:00 パンフレット配付。
メダカについての簡単な解説とクイズ。
- 10:20 屋内レクチャー終了後、道具を配付。
徒歩で池へ移動。
- 10:30 メダカ捕り開始。
- 11:00 メダカ捕り終了。
徒歩でネイチャーセンターへ移動。
- 11:10 捕れた生き物の確認。
- 11:25 クイズの答え合わせ。
- 11:30 メダカ配付、解散、終了。



●やはり実際に捕ってみなければ

世間では、「少ない、いない」と騒がれている「メダカ」たちであるが、米子水鳥公園の「つばさ池」には、一すくい網で、何十匹も捕れるくらい沢山生息している。リュウノヒゲモ、トリゲモなどの水草が多く生育しているので、メダカにとって棲みやすい環境なのであろう。レンジャーからメダカが沢山いることの解説を耳にして、訪れる観光客の方々が、

「絶滅しそうな魚でしょ？」

と驚かれることもしばしばである。このメダカたちは、カイツブリやコサギなど小魚が好きな鳥たちの貴重な食糧となっている。

観察会当日、池の岸辺には沢山のメダカが背を見せて泳いでいたが、子供たちの影が水面に映ると、お決まりのように沖へ沖へと逃げていく。そこで、逃げ場の少ない用水路に目標が集中した。子供たちは、我れ先にと喜んでメダカを捕まえていく。「子供は本能的にこういうことが好きなのかも」と感じさせる雰囲気であった。

どのようなところに網を入れれば沢山捕まえられるのか、これは実際に体験してみないと分からないことと思われる。メダカという生き物が棲んでいる環境を直接知る体験が、メダカをめぐる様々な問題を考える大きなきっかけにつながってくれることを願うが、これはあらゆる生き物について同じように取り組んでいくべきことであると考え。

●実はサンマ・サヨリと同じグループ？

調べてみて驚いたのだが、メダカは分類上トウゴロウイワシ目メダカ科メダカ属に分類されている。広いグループで見ると、サヨリやサンマと同じ目であるらしい。鳥でもスズメとカラスが同じスズメ目なのであるから、目レベルというものは裾が広いのかもしれないが、メダカが食材となっている身近な魚と同じ仲間というのも新発見であった。

●メダカという生き物が投げかけるもの

今回の観察会では、30分間で、主役のメダカと一緒にフナやチチブ、ヌマエビ、タイコウチ、コオムシなどの水棲動物も子供達の網に入った。米子市内在住の参加者に限定して、希望者には捕まえたメダカを飼育用に持ち帰ってもらった。殆どのグループが雌雄を何匹かずつ選んでポリ袋に入れていた。「お父さん、結婚して卵うむかな〜？」という親子の会話も聞こえてきた。

なぜ米子市民のみという枠組みを設定したかという、遺伝的にみたメダカの地域変異の問題があるからである。北海道を除く全国各地に分布しているメダカは遺伝子レベルで分けられている。大きく分けて「北日本型」と「南日本型」に分類され、さらに細かく「東日本型」や「東瀬戸内海型」「有明型」など地方ごとにまとまりを持ち、その数は10以上にも及ぶという。米子市のメダカは「山陰型」に分けられている。

できるだけ他の地域への流失を防ぐという目的で「限定」を設けた訳であるが、すでに各地で移入による遺伝子の攪乱は現実問題となっている。生息可能な環境の激減、外来種による駆逐圧、そしてこの遺伝子レベルの攪乱など、現代を生きる多くの野生生物がかかえた共通の問題がメダカにものかかっている。

●田んぼや小川に子供たちの姿を！

身近な生き物達が減少している昨今、虫捕り網や魚捕りの道具をもって外を遊び回る子供の姿もまた少なくなっている。地方ではまだしも、人口の多い地域では、田んぼや小川、雑木林そのものの存在が激減している。確かに、場所によっては地域をあげて地元の自然観察会を企画したり、学校行事の中でも自然体験を増やしていこうという動きが徐々に広がりつつあるようだ。このような取り組みをより拡大していけるように、自然教育・環境教育の場になるような「生き物たちが息づく空間」を取り戻していくことがますます重要になっていくであろう。

～鳥取県西部地震による休館のお知らせ～

2000年10月6日に発生しました鳥取県西部地震により、米子水鳥公園ネイチャーセンターは半壊し、全面的に建て直すことになりました。新しい施設が建設されるまで、ネイチャーセンターは休館となります。現在、仮設の観察施設を設置する準備が進められています。ネイチャーセンターへの立入りは禁止となっていますが、公園周辺での観察はできます。詳しくは下記の仮設事務所までお問い合わせ下さい。

<米子水鳥公園仮事務所>

〒683-0822

鳥取県米子市中町20

米子市役所旧庁舎3階 603会議室

TEL: 0859-32-5217

FAX: 0859-32-5218

<http://www.yonagimizudorikouen.or.jp/>

書評

『野鳥と共に八〇年』

松山資郎著 文一総合出版

1997年9月 定価(本体)3,200円

事務局 箕輪 多津男

去る8月17日に、松山資郎先生がお亡くなりになられた。享年93歳。その永きに渡り、日本の野鳥保護および鳥類の調査研究の基礎を築いてこられ、まさに生き字引と称される方であった。日本鳥学会、日本野鳥の会、山階鳥類研究所、そして日本鳥類保護連盟と、野鳥に関わる主だった団体のすべての存立とその後の活動に尽力され、その功績は計り知れないものがある。一方で、自ら目立つことを嫌われ、裏方に徹することで様々な事業を成し遂げられてこられた。その生き方とお人柄は、誰からも慕われ、常人にはとても真似のできないものであった。ここで改めて、心よりご冥福をお祈りしたいと思う。

本書は、そうした先生の自叙伝とも言うべき大作であるが、同時に明治以来今日に至るまでの、調査研究、保護、そして行政の取り組み等、野鳥に関わる人々のあらゆる活動を綴った貴重な記録集ともなっている。行間には、先生の野鳥に対する深い愛情と、その保護に対する熱い情熱が溢れており、現代の名著として、是非とも後世に語り継がねばならないものと確信する。一人でも多くの方々に、ご一読をお薦めしたいと思う。

終わりに、ここでは内容を省略させていただくが、8月22日に行われた告別式の最後に、松山先生の娘婿にあたり、当全国愛鳥教育研究会の顧問を永年務めていただいている柴田敏隆先生による親族代表のお言葉がとても感動的であったことを申し述べておきたいと思う。

※写真はP20左上に掲載してあります。

書評

『カモハンドブック』

叶内拓哉著 文一総合出版発行

2000年10月 定価(本体)1,000円

事務局 箕輪 多津男

日本で記録されているカモ科の鳥のうち、観察される可能性の高い種と、珍しい種であっても有名な公園や探鳥地での記録が多く、一般的にも観察される可能性があると思われる種、計46種が取り上げられている。その他に、カイツブリ等カモ類とよく間違われるカモ科以外の鳥4種と、さらに一部の家禽類や交雑個体例も掲載され、大変充実した内容の図鑑となっている。

写真についてもどれも鮮明で、一目で特徴を把握できるような構図が揃えられている。また、ハンディタイプなので携帯にも便利である。解説も、多くの初心者にかも類に親しんでもらいたいとの願いによるものであろう、大変分かりやすく且つ簡潔に書かれている。一方、雄に比べて識別の難しい雌だけを並べて比較したページもあり、懇切丁寧な編集に感心する次第である。通常のカモ類の観察については、これ一冊で十分と言ってもよいであろう。

カモ類は、その観察のしやすさなどから、バードウォッチングを始める場合に打って付けであると言われる。観察にはこれからが絶好の季節でもあり、この一冊を携えて水辺に繰り出してみてはいかがだろうか。

※写真はP20左下に掲載してあります。

書評

『カモメ識別
ハンドブック』

氏原巨雄・氏原道昭著 文一総合出版
2000年10月 定価(本体)1,000円

事務局 箕輪 多津男

本書は、カモメ類に精通した鳥類画家である氏原巨雄・氏原道昭両氏によって、野外でのカモメの観察と識別に役立つようにまとめられた、携帯にも便利なハンドブックである。8年程前に同じく両氏によってまとめられた『カモメ識別ガイド』があるが、その後得られた多くの知見を基に、イラスト・解説共にすべて新しく描き起こされ、見事な仕上がりを見せている。

取り上げられている種は、日本でその種と判断できる写真が撮られている種と、確実な記録のある種25種である。その他に「世界のカモメ」と題して、日本から比較的遠くない地域に生息し、日本未記録の種、及び一部の交雑種も紹介されている。なお、セグロカモメの仲間に関して、本書ではホイリングカモメやキアシセグロカモメ、ウスセグロカモメ(本種はまだ正式な和名がない)等を、海外における分類の趨勢に従って独立種として扱っており、これまでの図鑑にない新たな構成を示している。

さらに、それぞれの種のイラストでは第1回冬羽・夏羽、第2回冬羽・夏羽等、成長に伴う羽色の変化についても詳細に描かれ、また、成鳥・冬羽における種の検索表(パターン表示)も掲載されており、ベテランバードウォッチャーにも、大変読み応えのある内容となっている。もちろん、解説は大変分かりやすく書かれているので、初心者にとっても使いやすいと思われる。

カモメと同様、カモメの仲間も冬場が観察には最も適した季節であると思われる。本書を手を、改めて観察と識別にチャレンジしてみたいかがだろうか。

※写真はP20右上に掲載してあります。

書評

『探求—私のいた場所』
青柳昌宏選集

青柳昌宏著 どうぶつ社発行 定価
(本体)1,500円 240ページ

会員 増田 友紀子

青柳昌宏さんは、生物教師・盲学校の生物教師・校長・財団法人自然保護協会の事務局長・ペンギンの研究者など、多方面で活躍された方です。しかし、残念なことに2年前、他界されてしまいました。

この本には、青柳さんの歩んでこられた道のりがギュッと凝縮されて入っています。

少年の頃に書かれた昆虫の研究論文、生物教師としての授業観や自然観察指導法、盲学校の教師としての自然観察指導法や生物実験の方法、自然観察の心得やペンギン研究者としてのペンギンの論文など、様々な文章が集約されています。

長い年月を経ても内容は全く色あせず、今もって現代の学校教育や自然保護教育に通じるものがあります。

この本の中には、いくつか印象的な言葉があります。

「みんなが行くからと、同じ方向に行かなくてもいい。」

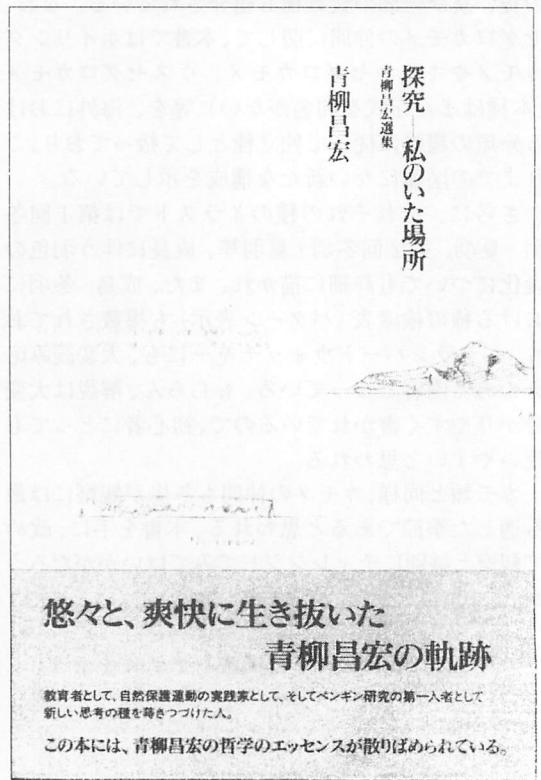
「顔をしかめない。本職を大事にして、ゆとりの部分で力を合わせる。」

「良い観察をするために留意して欲しいことは『全部見ようと思わない』ということです。」

この他にも、著者独自のエッセンスを加えた言葉たちが、たくさん登場します。青柳哲学を味わえる一冊と言ってよい本だと思えます。

自然に携わっている方、教職に就いていらっしゃる方、ぜひこの本を読んで下さい。きっと、何か新しい発見があると思えます。

※写真はP20右下に掲載してあります。



全国愛鳥教育研究会 役員の入れ代わり

<退任>

会長 江袋鳥吉氏(東京都世田谷区)
(ご逝去・2月)

副会長 杉浦嘉雄氏(大分県大分市)

常務理事 島田利子氏(神奈川県秦野市)
染谷優児氏(東京都小金井市)

以上4名

<新任>

顧問 村本義雄氏(石川県羽咋市)

会長 杉浦嘉雄氏(大分県大分市)

副会長 島田利子氏(神奈川県秦野市)
染谷優児氏(東京都小金井市)

理事 田村耕作氏(福岡県福岡市)
浜田孝正氏(熊本県熊本市)
浜本奈鼓氏(鹿児島県隼人町)

以上7名

全国愛鳥教育研究会 新役員名簿

(平成12年8月)

顧問 柴田敏隆(神奈川県横須賀市)
千羽晋示(東京都大田区)
松田道生(東京都豊島区)
村本義雄(石川県羽咋市)
柳澤紀夫(埼玉県入間市)

会長 杉浦嘉雄(大分県大分市)

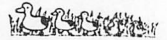
副会長 渥美守久(愛知県蒲郡市)
島田利子(神奈川県秦野市)
染谷優児(東京都小金井市)

常務理事 岩渕成紀(宮城県仙台市)
小野紀之(東京都大田区)
堤達俊(東京都町田市)
長屋昌治(千葉県千葉市)
平田寛重(神奈川県伊勢原市)

理事 浅沼和男(東京都三宅村)
井口豊重(東京都杉並区)
斎藤一紀(山梨県高根町)
皿井信(愛知県豊橋市)
武石千雄(大分県玖珠町)
田中忠(熊本県熊本市)
田村耕作(福岡県福岡市)
浜田孝正(熊本県熊本市)
浜本奈鼓(鹿児島県隼人町)
林梅夫(富山県礪波市)

監事 徳竹力男(東京都荒川区)
村口末弘(東京都世田谷区)

(五十音順)



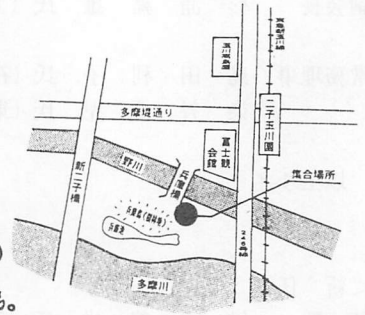
トラスト バードウォッチング [入門編] ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)を使ってバードウォッチング!

せたがやトラスト協会の《トラストバードウォッチング》は、今年も12月の第2土曜日に二子玉川の兵庫島河川公園で行います。

冬鳥たちが多く見られる最高のシーズンに、だれでも参加できる最もやさしいバードウォッチングを行います。どなたでも、お友達をさそいあつて気軽に参加してください。

次の内容と申し込み方法をよく読んで応募してください。お待ちしております。

- ◆ 日時 平成11年12月 9日(第2土曜日)
午前9時15分～11時30分(受付は9時～)
- ◆ 場所 兵庫島河川公園(集合場所は「兵庫橋」です)
(東急新玉川線「二子玉川駅」より徒歩3分)
※9時15分までに、兵庫橋に直接集まってください



- ◆ 持ち物 筆記用具と雨具。(双眼鏡・望遠鏡がある人はもってきてましよう)
もっている人は「ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)」も。
(※当日、受付でも販売しています。1冊50円です。)

- ◆ 服装 冬の河原は風が強く大変寒いです。毛糸の帽子や手袋などであたたかくし、はきものは歩きやすいものがよいでしょう。

- ◆ 参加費 無料です

- ◆ 雨天の場合 中止 ※なお、当日天候により判断のつかない場合は、

せたがやトラスト協会 ☎3789-6112へ午前8時～8時半までにお問い合わせください。

- ◆ 注意 子どもたちどうしの場合は、家族の人に

「いつ・どこで・だれと」を必ず言ってから参加しましょう。

[申し込み方法] (傷害保険加入のため、次の項目①～④をお書きください)

(ハガキで)

しめ切り

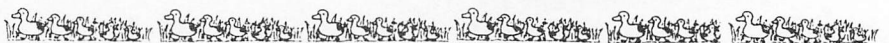
12月18日(金)必着!

- ①「トラストバードウォッチング」参加希望と書いてください
- ② 名前(家族や友達も参加する場合は全員の名前と人数)
- ③(団体・グループの場合)代表者の住所と氏名、年齢、電話番号
- ④ 学校での参加の場合は学校名と学年もお願いします

☎157-0066 世田谷区成城6-2-1 (財)せたがやトラスト協会
「トラスト バードウォッチング」係まで お申し込みください。



主催：(財)せたがやトラスト協会
後援：(財)日本鳥類保護連盟
全国愛鳥教育研究会



編集後記

◆杉浦嘉雄新会長挨拶

「今、朱鷺から学ぶべき」たくさんの方があ
る。そして、「なぜ、今、朱鷺なのか」が改めて広
く議論されるべきではないかと、かねがね思い続け
ていました。その意味で、杉浦嘉雄新会長の挨拶に
取り上げられた朱鷺に関する内容には、改めて共感
共鳴するものがありました。

会長も述べているように、本会としての今後の取
り組み方について、皆様からの御意見や御希望をお
待ちしております。

◆「地球と遊ぼう'99」

「地球と遊ぼう'99」は、小野紀之常務理事が他団
体や行政当局との間を取り持ち、実現したもので
す。前回の「地球と遊ぼう'98」（愛鳥教育No. 60で
報告済み）に続いて第2回目の取り組みとなりました。

それぞれの団体の特性を生かしながら共通の目的
達成に向けて協力するイベントの在り方を示すもの
として画期的なものではないかと思えます。

なお、本年も「地球と遊ぼう2000」が実施されて
おりますので、これについては別の機会に報告して
いただく予定です。

◆書評補足

『探求一私のいた場所 青柳昌宏選集』

会員の増田友紀子氏に本書の書評を書いていただ
きました。

彼女から本書発刊の連絡があったとき、『愛鳥教
育』に書評を載せましょうということにしたのです
が、彼女がこの本の制作に深く関わる一人であるこ
とや、発刊に至る経緯を教えていただいたことから、
それでは直接書いていただくのが一番ということ
から、執筆を依頼しました。

私自身、ざっと目を通しただけで、まだ十分に精
読できていませんが、青柳氏の業績やそのお考えが
コンパクトにまとめられているという印象を持ちま
した。

普段、愛鳥教育を志している者の一人として、次
のような章に心惹かれました。目次の中から抜粋し
てみます。

3 生徒にとって授業とは何か

—私の授業感の変遷—

- 4 自然観察指導の準備と実施
 - 6 自然保護教育の現状と問題点
 - 7 趣味としての自然物の採集をこう考える
 - 8 自然観察会の形式と指導
 - 9 観察の場としての動物園
 - 10 南極の生活と教育のシステム（講演要旨）
 - 14 身障者とも自然をわかち合いたい
 - 15 ネイチャア・フィーリング活動の歩みと
今後（講演要旨）
- 増田氏同様、皆様にも御一読をお勧めします。

◆役員改選

P21の通り、役員改選が行われました。任期は、
平成12・13年度の2年間です。

◆トラストバードウォッチング

P22の通り、恒例になりました(助)せたがやトラ
スト協会主催の「トラストバードウォッチング」が開
催されます。

毎回数百人の参加者数を記録し続けていますが、
多数の参加者に対応するための工夫と、野鳥ボラン
ティアの自主研修とが相まって、好評を博していま
す。

大都市の脇を流れる多摩川の河川敷のほんの一部
という環境でありながら、見られる野鳥の種類数が
比較的多いということから、改めて自然に対する見
方が変わるような体験ができるのもこの観察会の特
色の一つと言えるでしょう。

奮って御参加下さい。

(染谷)

愛鳥教育 No.61

平成12(2000)年10月31日

発行人	杉浦嘉雄
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F (助)日本鳥類保護連盟内
電話	03-5378-5691
FAX	03-5378-5693
会費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社